江差線10駅 最後の夏

2 渡島鶴岡

列車が山門と本殿の間を横切る禅燈寺

待合室清掃 児童の日課

■メモ　木古内町鶴岡、1964年12月30日に開業した無人駅。山形県鶴岡市内の羽越本線に既に鶴岡駅があり、区別するため「渡島鶴岡」と命名された。木古内駅から2・3㌔。

木古内駅から出発して4分。赤いトタン屋根と白壁の待合室が見えてきた。渡島鶴岡駅だ。

鶴岡地区は、現在の山形県鶴岡市出身の旧庄内藩士が、1885年（明治18年）に入植した。駅に近い禅燈寺は、境内を列車が横切ることで有名だ。山門と本堂の間を通過する列車を撮影しようと、この駅に降り立つ人も多い。

隣の吉堀駅から鶴岡小に列車で通う児童がいたため、渡島鶴岡駅は1964年の開業時から、鶴岡小児童たちが待合室を清掃してきた。待合室には子供たちが記した日誌が残され、利用者が感謝の言葉をつづっている。同校卒業生で鶴岡地区で酪農業を営む東出雄太さん(24)は「駅をきれいにするのが子供の仕事。鶴岡ではそれが当たり前だった」と懐かしむ。

東出さんは中学、高校への通学に江差線を利用した。今は通過列車を時計代わりに使っている。「正午前の列車が通ったので昼ご飯にしようとかね。鶴岡の住民はみんなそうしている」と笑う。「廃止は仕方ないけど、無くなるのはやはり寂しい」とうぶやいた。駅を大切にしてきた鶴岡小も児童数減少で2011年3月に閉校。さらに来年5月の江差線廃止と地域の衰退に追い打ちがかかる。

一方で鉄路廃止後を見据えた取り組みもある。町観光協会が7月に禅燈寺で開催した「夢語りの集い」と銘打った討論会には住民ら70人が参加。鉄路を残して、観光に活用できないかとアイデアを出し合った。座長を務めた好野秀哲住職(50)は「ピンチをチャンスに変えようと前向きにとらえ、次のステップに踏み出したい」と話す。

地域から鉄道がなくなる逆境をどう乗り越えるか。江差線廃止を控え、新たなまちづくりへの模索が既に始まっている。

赤い屋根の待合室が特徴の渡島鶴岡駅